■著者略歴■

草鹿　宏（くさかひろし）

神奈川県横浜市生まれ。新聞記者を経て文筆業。

著書「翔べイカロスの翼」（一光社）「勇者に翼ありて」（一光社）
「私は13歳」（集英社）「ムサシ世界へ翔ぶ」（集英社）
「菩提樹の丘」（集英社）など多数。
日本児童文芸家協会会員。

アツコが翔んだ碧い空　　定価 980 円

1986年5月15日　初　版

著　者　草　鹿　　宏
発行者　鈴　木　大　吉

〒113／東京都文京区本郷1－30－18
発行所　株式会社　一　光　社
電話　東京（813）3061
振替番号　東京4-181221
印刷・真珠社・製本・三森製本所

万一落丁・乱丁の場合はおとりかえいたします

草鹿　宏著

アツコが翔んだ碧い空

障害者の自立運動と「車椅子」同士の国際結婚

一　光　社

はじめに

サンフランシスコ近郊のバークレーは、身体障害者による自立生活運動の中心地として知られている。車椅子の「アツコとマイケル」もこの町で出会い、人間が人間らしく生きるための戦いの中で、たがいに信頼と愛をはぐくんだ。

ともに重度身体障害の宿命を背負った日本人のアツコとアメリカ人のマイケルが、つねに勇気と希望を失わず、国境を超えて結ばれるまでの生の軌跡は、「人間の幸福とは何か」という根元的な問いに答えたひとつの実証でもあった。

今もふたりは障害者運動にたずさわりながら、カリフオルニアの空の下で幸せな日々を送っている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

はじめに 3

1 宿命

生まれてきてよかった 9
出産時脊損 15
親の苦悩 19
家族のぬくもり 27

2 挑戦

車椅子でも飛行機に乗れるの？ 33
目覚めの春 37
自立への決意 43
夢は捨てない 48

3 飛翔

自由の国アメリカ初体験 58

夢は脹む　61
障害者の結婚　66
姉妹の会話　71

4 自立

ジュディ・ヒューマンとの出会い　78
C・I・Lの歴史　81
ルーム・メート　86
マイケル・ウインター　89
初対面のキス　94

5 予感

見つめ合って　99
送別の宴　107
帰国後の寂しさ　111
予期せぬラブ・コール　117

6 求愛
スタッフの一員に 120
母の直感 123
ハワイでの求愛 127
人間は幸せになるために生まれてきたのだ 132

7 苦悩
マイケルの講演 141
母への告白 148
父の勘気 154

8 決意
決断の時 163
父と娘 169
再びバークレーへ 175

障害者の愛と性　180

9　婚　約

マイケルの母　185
悪　夢　192
結婚の確認　195
アパート探し　198
誕生日のパーティ　202

10　華　燭

昭和生まれの明治育ち　207
父の同意　215
誰でも幸福になる権利がある　220
天晴れ、花嫁姿　225
おわりに　232

1　宿　命

生まれてきてよかった

「アツコ、今日は忙しいぞ。朝から会議がふたつあるんだ」
コーヒーカップを置いて、マイケルはナフキンを口にあてた。
「それから一時間刻みで来客が……」
と、車椅子を引き寄せる。
「わかってるわ、あなたはいつだって忙しいんだもん」
敦子が皿を重ねながらわらう。
リビングの広い窓から、早春のやわらかい陽が射し込んでいる。このアパートへ引っ越して、もうどれほどの日々が過ぎ去ったろう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

はずみをつけて車椅子に乗ったマイケルが、口笛を吹いて鏡の前へ行き、ネクタイをしめる。敦子はトレイにのせた食器をキッチンへ運び、車椅子を後退させて洗濯機のスイッチを入れた。

「幸せかい、アツコ？」

ジャケットの袖に手を通して、マイケルが聞く。

「考えるひまもないくらいよ、時間のたつのが早すぎて」

「じゃあ、時計を止めるか？」

「せめて一時間でもね」

敦子の脇に車椅子を近づけて、マイケルが優しくキスする。敦子は首をすくめた。

「くすぐったい」

起きてから何度目のキスだろう。頬から顎まで、ひげがマイケルの顔を半分おおっている。彼と会うまで、敦子はひげの感触を知らなかった。ひげをはやした男がまわりにひとりもいなくて、なんとなく異和感があった。だが今は、マイケルのひげが安らぎをあたえてくれる。

「さあ、行くよ」

「忘れ物、ないわね？」

ふたりは部屋を出る。車椅子を動かす手に力を入れて、ゴトンと段差を越える。廊下のはずれにあるエレベーターの前でとまり、ボタンを押す。一階へ降りて舗道へ出ると、空はまぶしいほ

ど明るく光り、街路樹の葉がかすかな風にそよいでいた。

二台の車椅子が路上に影をひいて走る。ぐんぐんスピードアップするマイケルを敦子が追う。ローラースケートをはいた子供達が、声を上げてふたりに手を振った。子供が大好きなマイケルは、「おはよう！」と走りながらこたえる。

いつも犬をつれている白人の夫婦に町角で出会った。まだ言葉をかわしたこともないが、なぜか親しみを感じている。ジョギングウエアの若い女性がふたり、軽やかなフォームで向う側の歩道を走って行く。敦子はブロンドの女達を目で追った。

人は二本の足で歩くと、誰もが当然のように思っている。それができなければ、人間ではないのか。これまで多くの身体障害者達は、肉体のある部分が普通に機能しないというだけで、社会から不当に疎外され、差別的な目で見られていた。敦子とマイケルも、二本の足では歩けない宿命を負って、この世に生きている。

だが、ふたりは今、なんと幸せそうに見えることか。マイケルは逆境をバネにして、身体障害者の自立生活運動に没頭し、全米の注目をあつめるリーダーの位置にいる。そして敦子は、彼にとって最良のパートナーであり、かけがえのない妻である。

国境を越えてマイケルと結ばれた敦子は、新しい人生に旅立つ喜びと決意を抱きしめてアメリカへ渡った。カリフォルニア大学のあるウエストコーストの学園町バークレーに、マイケルが所

長をつとめるC・I・L（Center for Independent Living 障害者自立生活センター）の本部がある。敦子もスタッフのひとりとして迎えられた。

アパートから車椅子で約十分の距離にあるC・I・Lのオフィスは、緑に囲まれた大学のキャンパスからほど近いテレグラフ通りに面した、細長い建物だ。入口の手前に電話機を低く設置した身体障害者用のテレフォンボックスがあり、右側は駐車場になっている。

透明なアクリルの扉がある玄関も、車椅子で出入りできる幅があり、窓際には来客用のベンチと、C・I・Lの内容をアピールするパンフレット類を揃えた台がある。だが、最も特徴的な点は、ここで働くスタッフの半数以上がなんらかの障害を持っていることである。C・I・Lは閉鎖的な施設から解放されて自立したいと願う身体障害者の夢を、独自のプログラムによって実現させてきた。

「われわれが自分の障害に劣等感を抱き、社会から守られようとする意識を断ち切らない限り、自立することはできない。自分が社会の中でどう生きるか、何ができるかと試みる力こそ、自立への唯一の方法だ」

と、マイケルは考える。

彼の日常は、C・I・Lを訪れる多くの障害者に対して、個々の能力を開発するための援助をあたえることについやされている。

「障害者になまじの同情や憐憫はいらない。隔離された施設や家庭から社会へ出た当座はとまどうが、彼らが自立への強い意志を持ち、実社会で生きる方法を知れば、自分を取り巻く環境を変えることが可能になる。C・I・Lはこれまで何千人もの障害者にそれを教え、彼らの多くが一流企業に就職している。勇気と行動力があれば、怖れることは何もないのだ」

敦子はマイケルの信念に、激しく胸をゆさぶられた。

それにしても、日本人の自分とアメリカ人のマイケルが、めぐり会った運命の不思議を感じずにはいられない。ただの偶然とは割切れない何かが、ふたりを結びつけたのではないか。遠い過去から約束されていた出会いのような気がしてならなかった。

あれは何がきっかけだったか、敦子が三度目の渡米をしてまもなく、マイケルの障害者用乗用車でサンフランシスコへ食事をしに行ったことがある。たしか、長いベイ・ブリッジを渡ってから、彼は敦子に話しかけた。

「アツコは、ぼくにうそをつかないと誓えるかい？」

とっさに意味がわからず、答えるのにとまどった。

「本心を聞きたいんだ」

「どういうこと？」

声が震えた。マイケルはちらっと敦子のほうを見て、静かに言った。

「素直に言ってごらん。きみは、生まれてきてよかったと思う？」
どきりとする質問だった。
「今ははっきり、よかったと思えるようになったわ」
「それでいい、ほっとしたよ」
ライトの光で霧が濃くなってきたのがわかった。
「ぼくは自分の運命を呪ったことがないんだ。小さいときからやんちゃで、どこの子供より元気だった。動きまわっては、骨折ばかりしてたけどね」
マイケルの障害は、遺伝性の骨形成不全で両足が極端に萎縮していた。
「私は母がお産したときに、脊髄の神経が切れたんですって。今まで誰を恨んだこともなかったわ」
「きみとはわかり合えそうだ」
「ありがとう、今夜はとても楽しかったわ」
うなずいて、マイケルはカーラジオのボタンをプッシュした。
目をつむると、日本にいる家族の面影がつぎつぎに浮んでくる。自分の意志でアメリカへきたのに、胸がしめつけられるのはなぜだろう。寂しさとも懐しさともちがう。それはたまさか敦子の心の岸辺をぬらす、言いようもない感情のさざ波だった。

出産時脊損

昭和三十四年十月十四日、敦子は福島県郡山市で生まれた。父桑名茂、母ヤイ子の長女である。

父の実家は猪苗代湖に近い湖南町福良の兼業農家だったが、茂は会津農林学校を卒業後、地元の中学校の代用教員になった。教育に生きがいを見出した彼は、さらに福島大学の中学臨時教員養成所へ通って教諭の資格を取得し、湖南町月形の中学に転じて体育と社会科を受け持った。同じ郡山市内の商家の娘だった敦子の母と見合い結婚したのは、その頃である。

「お父さんは、ひと目で私が気に入ったのよ。あの人と結婚できなければ死ぬと言ったんですって」

母はそんなことを言って、敦子をわらわせた。律気で温厚な父の人柄と、屈託のない母の明るさがほどほどに調和して、一家のあたたかい雰囲気をつくっていた。

翌年の春、ヤイ子は初めての子を身ごもった。妊娠中に胎児が逆子とわかり、何度か正常に直す処置をしてもらったが、なかなか思うようにいかない。それが多少不安だったが、定期検診を受けていた総合病院の担当医は、たとえ逆子でも出産に支障はないと診ていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com